

【懇親会】 CALTia PARK(カルチアパーク) 大分市府内町1丁目1-29

*祝祭の広場横、リーガロイヤルホテル地下

会費 5,000円 18:00~開始

3 主催 九州子どもの福祉臨床と家族支援研究会 第24回研修会 in 大分実行委員会
(大分県中央児童相談所内 問い合わせメール:sato-shinya@pref.oita.lg.jp)

4 日程

受付	開会	全体会	分科会Ⅰ (3択)	分科会Ⅱ (3択)	分科会Ⅲ (3択)	全体会	懇親会
9:30	9:50	10:00~ 11:30	12:30~ 13:50	14:00~ 15:20	15:30~ 16:50	17:00 ~ 17:30	18:00~

5 定員 120名程度

6 参加要件

子どもと家族支援に携わる(児童福祉施設、児童相談所、市町村担当課、司法機関、医療機関、保健機関、教育機関等)職員、及び里親、ファミリーホーム養育者等で、守秘義務を遵守する立場にある方

7 費用 ※申込み及び振込み期限:令和2年1月31日(金)

参加費 2,000円 *当日持参の方は 3,000円

懇親会費 5,000円

研修会のみ参加される方は2,000円を、研修会と懇親会の両方参加される方は7,000円を、振込期限までに下記へお振込みください。参加申し込み及び振込みを確認した時点で、申込み受付の完了とします。振込みにかかる手数料は、各自でご負担願います。

入金後のキャンセルにつきましては、2月21日(金)までをお願いします。キャンセルされた方には参加費から振込み手数料を引いた額を返金します。2月22日(土)以降のキャンセルについては、返金できませんのでご了承ください。

振込み先 【口座名義】 ごとう 後藤 しんじ 慎司

ゆうちょ銀行から

【記号】17220 【番号】17465771

ゆうちょ銀行以外の銀行から

【店名】七二八(読み:ナナニハチ)

【店番】728 【預金種目】普通預金

【口座番号】1746577

8 参加申し込み・お問合せ方法

参加申し込み・お問合せ共に、インターネット「こくちーず」による受付を利用します（スマートフォン等からも可能）。右記QRコードまたはURLよりアクセスの上、お申込みください（こくちーずトップからは探せません）。分科会の選択は、第二希望まで入力をお願いします。なお、電話での問合せは受付けていませんのでご了承ください。

※こくちーず（九福臨）

<https://www.kokuchpro.com/event/kyufukurinoita/>



↑QRコード

9 プログラムの内容

大会テーマ：子ども家庭支援における協働の推進

（1）全体会（10:00～11:30）

ひとり語り

『片隅から…ともに！ ～遺したいことば、伝えたいところ～』

語り手： 後藤 慎司（大分県子ども・女性相談支援センター長）

児童相談所などの現場を経験してきた語り手が、定年退職を目前にして、「子ども家庭支援における協働の推進」という全体テーマを念頭に、30年余の経験を振り返りながら、その時々は何を考えたか、今そしてこれからにつながる問題意識や実践の遺物について語ります。

一人称での小さな一隅の物語り。さて、誰かに何か伝わるでしょうか。

「他愛ない話なので、期待せず気楽に聞いてもらえるとありがたい」そうです。

(2) 分科会 I (12:30~13:50) ㉮~㉯

ア

施設の高機能化、多機能化を実現する
～10年後の社会的養育を見据え～
企画： 佐藤 慎也 (大分県中央児童相談所)

「新しい社会的養育ビジョン(平成29年3月)」では、家庭養育優先原則を進める中において、児童福祉施設は施設養育を必要とする子どもの養育に関し、「できる限り良好な家庭的環境」において、高機能化された養育や保護者への支援等を行うとともに、里親や在宅家庭への支援等を行うことなど、施設の高機能化・機能転換を図ることにより、更に専門性を高めていくことを期待されています。また、地域におけるニーズや資源の状況、自らの「強み」・「弱み」も踏まえつつ、「地域の社会的養育を支える専門的な拠点」となるよう変革していくことも期待されています。

このビジョンを受けての現場の対応は様々です。参加者とグループディスカッションを通じて、「将来の社会的養育」について考える機会をもてれば幸いです。お気軽にたくさんの方の参加をお待ちしています。

イ

『検証事例報告から、いかに教訓を学び取り、活かすか?』
企画：後藤 慎司(大分県こども・女性相談支援センター)
検証事例研究会有志

3年ほど前から、隔月で有志による虐待死亡事例等検証報告書の勉強会を行っています。節目となる第20回目を「朝まで生テレビ」風に行います。

「ケースが100通りあれば背景も100通り。経験の浅い職員には検証報告が経験知代わりになる」と言われます。誰しも重大事例の経験は避けたいもの。自ら経験せずとも、また自らは経験しないで済むよう、貴重な検証報告から何を教訓として汲み取り、日々の実践に活かしていくか。共に学び合いたいと思います。

その日の気分で、中心のテーブルで議論の輪に加わってもよし、周囲の見物ギャラリーに徹してもよし。取り扱う報告書(事例)は当日のお楽しみ…。

ウ

児童相談所のケースワークのあり方について話してみよう!
(SOS(サインズオブセーフティー)に取り組んでみて)
企画：山崎 聡一郎・斉藤 孝生(佐賀県総合福祉センター)

児童相談所は、平成28年の児童福祉法改正や、児童の虐待死亡事例を受けて、ますますケースに取り組む必要性が高くなり、保護者対応も以前に比べて複雑化し対応が困難になってきていることから、児童福祉司に高いレベルが求められるようになってきています。

しかし、当所(佐賀県中央児童相談所)でも担当福祉司の経験がなかなか積み重ならない状況と、児童福祉司の配置基準の見直しで未経験の職員が増えていくことが予想されていることもあり、昨年からは本格的に児相としてSOS(サインズオブセーフティー)の導入を行い、ケースワークの強化に取り組んでいます。

導入する中でいろいろな課題が出てきているので、佐賀の取り組みを紹介できたり、九州の仲間とケースワークのやり方を一緒に考えることができればうれしいです!

(3) 分科会Ⅱ (14:00~15:20) ①~③

工

『施設と児相によるワーキンググループ～'ぱくわく'の取り組み～』
企画：竹中・秋丸・田崎・山口・尾上（福岡市こども総合相談センター）
桑鶴・平山（児童養護施設 福岡子供の家）
コメンテーター：高橋幸市（心理支援オフィス緑蔭舎）

これまで福岡市において、様々な種類の施設内児童間暴力への対応に試行錯誤してきたが、既存の支援体制では不十分であるという反省から、昨年度より児相と福岡子供の家の協働ワーキンググループを立ち上げた。ケアワーカーと心理で役割分担をし、職員、子どもそれぞれを対象とした別部門を立ち上げ、同時並行的にアプローチを始めている。児相と施設協働での取り組みについて報告し、新ビジョンの流れの中で同じ課題を抱えているであろうフロアの皆さまと一緒に、今後の施設におけるケア及び児相の役割について考えたい。

取り組み1年目、特別なプログラムを実施しているわけでもなく試行錯誤しています。皆さまからの学びを今後の活動に活かしたいと思っています！

才

『DV支援との連携で、子ども虐待死事件をどう防ぐか？』
企画：後藤 慎司（大分県こども・女性相談支援センター）
大分県婦人相談所職員有志

平成31年1月発生の子葉県野田市事件を契機に、法改正も含めて、DVと児童虐待の一体的な理解と対応が強く求められるようになってきました。強固なDV支配の実態は、目黒区事件の裁判過程でもクローズアップされました。

DV対応と児童虐待対応。互いに法的根拠やアプローチ方法が異なる両者では、必ずしも連携が容易でない面もありますが、その具体的な連携のあり方について探求したいと思います。

端的に、「実際、どのように連携していたら、事件は防げたのか？」。

各グループに婦人相談所職員も加わって、参加者同士で有効な具体策を議論します。

力

スクールソーシャルワーカー（SSW）が行う学校でのケース会議
～連携機関が情報共有・焦点化・アクションプランを行える方法～
企画： 奈須 郁子（大分県SSW）

毎月、大分県社会福祉士会で行われる子ども家庭支援委員会の定例会で、「学校でケース会議を行っているがうまく進まない」というスクールソーシャルワーカー（以下SSW）の悩みがしばしば出ていた。特に新人SSWにはハードルの高いコーディネート機能と考えられる。平成28年7月に大分県教育委員会が出した『スクールソーシャルワーカー活用ガイドライン』には「6ケース会議の運営について」と提案されているが、現場でSSWは十分に活用できていない。

そこで、日本社会福祉士会 認定社会福祉士のスーパービジョン講義を参考に、学校でのケース会議の手順を作成した。連携するそれぞれの機関が情報を共有し、焦点化し、アクションプランを行って、会議を60分で終わることが出来る。新人のSSWが手順どおりに行えばできるよう工夫した。今回は、手順について模擬ケース会議を通して説明する。

(4) 分科会Ⅲ (15:30~16:50) ㊦~㊧

㊦

アフターケアを考える

企画：若杉 篤 (熊本県 児童養護施設 光明童園 里親SW)
高松江三子 (熊本県 中央児童相談所 児童施設・初動課課長)

施設や里親で養育を受けた児童の多くが18歳となる年度末で措置解除されま
す。しかしそのような元児童が、しばしばトラブルに巻き込まれている現実が
あることを支援者の私たちは知っています。

支援者は、措置中に自立支援を行っていますが、その「自立」とはどういっ
たことなのでしょう？また誰が、いつまで、何を、どのように関わっていく
ことが望ましいのでしょうか？

今回、よくありうる事例を契機としてアフターケア、またアフターケアにつ
ながるインケアのあり方をグループで、フロアで考える時間を皆さんと一緒に
持ちたいと考えています。

㊧

市町村と児童相談所との連携

企画： 永淵 悦子 (大分市中央子ども家庭支援センター)

近年、幼い子どもの虐待死事件が頻発し、報道でも大きく取り上げられる
中で、再発防止及び相談支援体制の強化策として、「連携」というキーワード
がクローズアップされている。「連携」とは何か、関係機関で実現可能な「連
携」の実現に必要なものは何か。市町村が、第一義的な相談援助機関と位置づ
けられた、平成17年の児童福祉法改正から十数年が経ち、新たな時代令和を
迎えた今、市町村と県(児童相談所)との連携について、改めて検討したい。

「連携」について、課題、うまくいっている事の現状を整理し、あるべき姿
(理想)とその方法について、県・市のそれぞれを経験した立場(交流人事経
験者)から、議論していきたい。

㊧

「記入するだけで、リソースに気がつく！

保護者も支援者も、元気が出てくるチェックリストを作りたい」

企画： 太田 義隆 (福岡市こども総合相談センター)
高木 裕子 (福岡県久留米児童相談所)

ある相談機関の方から、「家族アセスメントのために、以前はチェックリス
トを保護者自身に記入してもらっていたこともあるんですけど、書きながら
『あれも/これも出来てない』と落ち込まれる方がいて・・・」という話を聞
きました。そこで“『書きながら元気
になるチェックリスト』があったらいいのにね？”と思いました。

リスクアセスメント同様に、リソースのアセスメントも重要です。リソース
の数値化や、客観性はさておき、元気になるチェックリストの質問を考える”
という作業そのものが解決志向ですし、また“相手のリソースを探してエンパ
ワーしていく面接の台詞を考えて、ストックを作る”こととほぼ同義だろうと
思います。そんな作業をみんなで楽しみながら、知恵を絞って考えてみませ
んか？“こんなのはどう？”みたいな、少しでも元気になる新しい視点の名台詞
を探しましょう！それが即“日々の臨床に役立つsmall&usefulなお土産”に
なるはずですよ。

(5) 全体会 (17:00~17:30)

各分科会について、企画者から「キーワード」にて概要報告をしていただき、フロア全
体で共有をはかりたいと思います。